

# CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.160 October, 2023

## 目次

- 〈お知らせ〉.....1
- 〈CAPS企画の報告〉
  - CAPS主催講演会  
「アジア史探訪——史料の杜(もり)をゆく」報告  
CAPS ポスト・ドクター 波照間 陽.....2
- 〈2023年度 研究プロジェクト紹介〉
  - パイロット研究  
「アジア太平洋圏活性化のための次世代電池材料開発へ  
向けたLi合金化技術の開発」  
理工学部 教授 齋藤 守弘.....4

- 〈招聘外国人研究員との交流報告〉
  - Understanding Gen Z Market in the Post COVID-19  
Era of Tourism: Destination Attributes from a Case  
Study of Japan  
Oratai Krutwaysho  
Rajamangala University of Technology Lanna  
Chiang Mai, Thailand.....5
  - 拡大研究会「タイにおけるグローバルツーリズム」報告  
経営学部 3年 田戸岡 快聖.....6
- 〈シリーズ 本を読む〉
  - 『自動運転レベル4 どうしたら社会に受け入れられるか』  
(楠笠堯士著、学芸出版社、2023年)  
理工学部 准教授 竹本 雅憲.....7
- 〈CAPS活動報告〉.....8

## お知らせ

アジア太平洋研究センターでは以下のイベントの開催を予定しております。みなさまのご参加をお待ちしております。

成蹊大学アジア太平洋研究センター主催講演会

# 東京の物価は どこまで上がるのか

長らく続いたデフレの時代が終焉し、ふたたびインフレの時代が到来しつつあります。本講演では、POSシステムやクレジットカードから日本の物価に関するビッグデータを収集・分析する渡辺勇教授に基調講演いただきます。また、崔真源エコノミストに民間研究者の立場から日本の物価動向について、前ドイツ・ゲーテ大学助教授のマルクス・ヘッケル博士に欧州から見た日本銀行の対インフレ政策に対する評価をお話いただきます。

**参加無料**  
定員250名  
| 申込不要 |

2023  
**11/4**  
13:30-15:30 (開場13:00)  
成蹊大学6号館301教室

※環境保全のため、当日は紙文書の資料配布はございません。会場にてQRコードから電子資料を配布します。

イベント詳細は  
CAPS公式サイトを  
ご覧ください。

https://www.seikei.ac.jp/university/caps/

プログラム

- 13:30-13:40  
開会挨拶・研究所紹介
- 13:40-14:20【基調講演】  
「物価と資金の好循環：そのメカニズムと実現可能性」  
渡辺 勇 東京大学経済学専攻、ハーバード大学Ph.D.、日本銀行を経て2011年より帰国。
- 14:20-14:50【講演】  
「物価高で、投資トレンドはどう変化している？」  
株式会社グッド・ニュースカンパニー(GNC) 代表取締役  
崔 真源 氏  
神戸大学経済学部中、一橋大学MBA(ファイナンス)、  
日経CNBC経済委員の他、カオナビ(常設マナーズ)  
の他社取締役も兼任する。
- 14:50-15:20【講演】  
「日本銀行と欧州中央銀行の金融政策」  
ドイツ経済研究所(CPIA)・リサーチ・フェロー  
マルクス・ヘッケル 氏  
デュイスブルグ・エッセン大学博士課程修了。ゲーテ大  
学経済マネジメント学部を経て2018年より現職。専門は  
日本および欧州の金融政策および中央銀行。
- 15:20-15:30  
質疑応答・閉会挨拶  
【司会】 成蹊大学経済学部助教授・アジア太平洋研究センター所長  
永野 謙

成蹊大学アジア太平洋研究センター主催オンライン講演会

# 日本の インド太平洋戦略と ウクライナ紛争

視聴無料  
先着500名  
| 要申込 |

2030年日本・米国・インドの安全保障政策を  
各国の立場から展望します。

2023  
**12.11(予定)~3.31** オンデマンド配信

2022年2月のウクライナ紛争以降、日本と米国は、新たな安全保障同盟の枠組みとしてインド太平洋戦略を掲げています。そして、ロシアと戦後長きにわたり強い関係を持つインドは、独自の立場を維持しています。2030年にかけて、この日本、米国のインド太平洋戦略はどのような展開を見せるのか、そしてインドの対日政策、対米政策はどのように進むのかを、3名の有識者が講演します。

使用言語：英語 (逐語通訳あり)

「日本のインド太平洋戦略とウクライナ紛争」 「米国のインド太平洋戦略」 「インドの対日本・米国・ロシア政策」

日本経済新聞社コメンテーター  
秋田 浩之 氏  
1987年入社。政治家、北京支  
店、ウクライナ支店などを経て、  
2009年より編集委員兼編集長。2017年2月より現職。2018年度ポ  
ーン・上田記念国際記者賞受賞。

国際基督教大学教養学部教授  
スティーブン・ナギ 氏  
インド太平洋の安全保障と新興国  
との国際関係を専門とする。香港中  
文大学助教授、カナダ国際問題研究  
所所長を経て現職。日本および北米に  
おいて有識者として活動中。

ジャワハルラール・ネー魯大学国際・イ  
ンド影響研究センター所長フェロー  
ティトゥリ・パス 氏  
インド太平洋地域の国際政治、地  
政学を専門とする。現在、インド国  
際研究所において客員フェローを兼  
務するとともに、2022年には米国防  
務省の客員フェローも務めた。

司会： 成蹊大学経済学部助教授・アジア太平洋研究センター所長 永野 謙

お申込  
方法

下記URLまたはQRコードよりCAPS公式サイトにアクセスの上、  
申込フォームに氏名・メールアドレス等をご入力ください。  
※初めて当センターのイベントに参加される方は登録(無料)が必要です。

https://www.seikei.ac.jp/university/caps/

申込はご自由

成蹊大学

アジア太平洋研究センター Center for Asian and Pacific Studies (CAPS)  
Tel: 0422-37-3549 (月-金9:00-17:00) Mail: caps@jim.seikei.ac.jp  
〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-1-1

## CAPS 企画の報告

### CAPS 主催講演会「アジア史探訪——史料の杜(もり)をゆく」報告

CAPS ポスト・ドクター 波照間 陽

アジア太平洋研究センター (CAPS) 主催の本講演会は、2023年7月29日に本学4号館ホールで開催された。今回はコロナ禍を経て4年ぶりの対面開催となり、酷暑にもかかわらず240名の方にご来場いただいた。文学部の中野由美子教授が司会を務め、同学部の佐々木紳教授と樋口真魚准教授、埼玉大学大学院人文社会科学研究所の久保茉莉子准教授、東洋文庫研究員の小松久男・東京大学名誉教授の4名から、史料との出会いやアジア史の魅力についてそれぞれご講演をいただいた。以下に、講演会の内容をレポートする。

はじめに、CAPS所長の永野護教授 (経済学部) が開会の挨拶で「未来のことを知りたい、その手掛かりを掴むために歴史を学ぶことが重要な目的の一つであり、また、ここで掲げられた日本、中国、トルコ、中央アジアは今後50年においてこれまで以上に重要になる地域である」と本講演会の意義を述べた。次に、佐々木教授より趣旨説明があり、史資料 (文字史料と非文字資料) に触れることで得られる体験、すなわち「史資料体験」にいきなうため、東アジアから中央アジア、西アジアまでの広いエリアにまたがって、研究者が行ってきた史資料体験を共有していく、と本講演会の概観を示した。

#### 日本

樋口准教授は「外交文書を発見する一日本外交史」というタイトルで、専門とする日本の対国際連盟外交について報告した。戦前日本の一般的なイメージや最近の研究を簡単に紹介した上で、戦前日本が「孤立への道」「戦争への道」を進んでいった理由を問うことは今でも重要な研究であると述べた。自身の大学院での研究活動を振り返り、現在の研究テーマに出会う過程を語った。研究当初は新史料があれば良い論文が書けると思い込んでいたが、指導教授から『日本外交文書』といった基礎史料を悉皆的に読み込むことが大事だという助言を受けて、毎日その史料集を読むことを自身に課した。専門家の間でもほとんど知られていないマイナーなモントルー会議 (1936年) の中に新しい論点を発見し、修士論文を完成させることができた。博士課程では、脱退後の対国際連盟外交をテ-



マに研究を進めた。モントルー会議以前から、国際連盟との付き合い方について日本外務省内で路線の対立があったことが『日本外交文書』から見えてきたという。最後に、「『新史料』とは『誰も見たことのない史料』ではなく『誰でも見ることができ、見落とされてきた史料』である」と自身の史資料体験をまとめた。「まずは興味のある史料集を手にとって熟読することで、新たなテーマや未開拓の領域が見つかるのではないかと助言した。

#### 中国

久保准教授は「檔案館に通う—中国近現代史」というタイトルで、中国の「檔案」と呼ばれる文書や檔案館がどういうものかを中心に報告した。まず、国際都市・上海の形成について、19世紀半ばに開港したのち世界と密接に結びつき、自由、多様性、国際性のある都市に発展していった過程を、当時の写真を用いながら紹介した。経済の中心地である上海では取引に関する揉め事や犯罪が多かったため、法律関連の職の需要も高かったという。次に、中国の資料公開状況を概観した。1970年代末以降、「改革開放」政策により中国大陸及び台湾で膨大な史料が公開され始めた。さらに90年代以降には各地の文書館が解放され、2000年代に入ると交通インフラが整備され、史料情報がデジタル化され、史料へのアクセスがより容易になった。また、主として中国の政府機関が政務運営のために発行し保管してきた文書である「檔案」について、自身が研究で利用したものを参照しながら、その特徴や史料的価値を紹介した。最後に、現地で史料を見つける・読むことの面白さを強調した一方で、現地で目にした史料が研究対象として適切かどうか

批判的に見ることも必要だと述べた。

### トルコ

佐々木教授は「書簡史料を辿る—トルコ近現代史」というタイトルで、オスマン帝国の政治家ミドハト・パシャの自叙伝に収録されている書簡を中心に報告した。ミドハトは書記官僚・州知事として経験を積んだのち、1876年に大宰相（政治と軍事を従える最上位の官位）として近代憲法を起草・発布した人物である。君主の暗殺を画策した疑いで81年に逮捕され有罪判決となり、アラビア半島に流刑されたが、獄中で自伝と書簡を記した。自伝には政治家「公人」としての側面、書簡史料からは「私人・家庭人」の側面が読み取れる。家族に宛てた書簡は、役人を介して検閲を受ける公式ルートと、監獄内や周囲の協力者を募ってやり取りされた秘密ルートのいずれかを経ている。当時は手紙のやりとりはスムーズではなく、行き違いや検閲による不達がよく起きていたという。暗殺の気配を感じていたミドハトは、謎の死を遂げる直前に家族に宛てた手紙を記し、秘密ルートで送った。また、遺言状には家族やオスマン帝国の担う子どもたち・孤児を気にかける言葉が盛り込まれていた。自身の子や孫だけでなく次世代の子どもたちのことも視野に入れて晩年を過ごしたことが書簡を通して見えてくる、と報告を締め括った。

### 中央アジア

小松名誉教授は「新聞・雑誌史料を読み解く—中央アジア近現代史」というタイトルで、史料そのものがいかに面白いかが、史料の魅力について報告した。まず、背景として近現代の中央アジア（トルキスタン）の歴史を紹介した。1867年、中央アジア地域は帝政ロシアの軍事的制圧によりトルキスタン総督府が設置された。この年、日本では大政奉還が行なわれ、近代化に向けて歩み始めたが、トルキスタンはロシアの植民地となったのが対照的である。1917年のロシア革命を経て、ソ連を構成する5つの共和国が成立した。大きな変革が連続して起きていた20世紀初頭には中央アジアでも社会・文化運動が活性化した。この時代のことを知るには2つの史料がある。一つに帝政ロシアの統治機関に蓄積されたアルヒーフという文書があり、現在はロシアや各共和国の公文書館で保管されている。いかなる統治が行なわれていたかを示す貴重な史料である一方、支配者からみた中央アジア社会の姿が記録されているため、実相が見えづらい。もう一つは、現地語で書かれ、生の声を伝え



る新聞・雑誌史料である。知識人が自作した教科書から新聞雑誌に載っていた広告や連載小説、風刺雑誌まで紹介しながら、ムスリム社会の啓蒙、改革、連帯が試みられていたと論じた。最後に、新聞・雑誌史料の可能性として情報の豊かさや多様性を挙げ、アルヒーフ史料と共にバランスのとれた吟味をしていけば新しい歴史像が構築できるのではないかと将来性を示した。

### 質疑応答

講演会の終盤には、報告者4名が登壇し、会場から寄せられた多くの質問をピックアップしながら返答した。まず、佐々木教授は私人としての側面にスポットライトを当てる研究の重要性を問われ、「人物に注目すると歴史が身近に感じる」とその魅力を伝えた。次に、小松名誉教授は、今後はトルコや中央アジアが重要であるという聴衆からの指摘に同意した上で、この地域やトルキスタンに関心を持つ研究者が増えることを期待したいと述べた。続いて、久保准教授は現在の檔案館へのアクセス状況を聞かれ、以前と比べて当局の規制が厳しくなっており警戒する必要があるが、学術交流を止めてはいけないと述べた。また、20世紀初頭の中国の文書を読むことの歴史的意義について、近現代の中国・台湾の国家形成を知るために重要だと指摘した。そして、樋口准教授は戦前の日本と現在のロシアの類似性を問われ、両者が国際連盟、国際連合の常任理事国の立場で侵攻を行なった事例として、先行する戦争（第1次、第2次世界大戦）の戦勝国であったが主要なルールメーカーではなかったという共通点があり、歴史学もこうした比較検討をできるのでは、と応答した。

最後に、佐々木教授が「史資料体験は誰にでもできることであり、実際に史資料を手に取り、考え、感じるところから始めていただきたい」と全体を締め括った。



## 2023年度 研究プロジェクト紹介

### パイロット研究

#### 「アジア太平洋圏活性化のための次世代電池材料開発に向けたLi合金化技術の開発」

理工学部 教授 齋藤 守弘

近年、電気自動車 (EV) は欧米や中国を中心に急速に普及し始めており、EV 元年 (2010 年) には困難であった 1 回充電で 500 km 走行も可能となり、ガソリン車並になってきている。一方、電動化だけでなく、昨今の AI ブームにも関連して IoT の一環であるコネクティビティ化や自動運転等への対応も平行し、車の EV シフトによる CASE の実現が世界的に推し進められている。このような背景のなか、駆動電源となる大型蓄電池への要求は益々高まり、更なる高エネルギー密度化と低コスト化が切望されている。しかし、既存のリチウム (Li) イオン電池 (LIB) ではこれらの点から限界に達しつつあり、それらを十分に解決可能な次世代電池の開発が急務となっている。

我が国でも全固体電池をはじめ、Li 硫黄電池や Li 空気電池など様々な次世代電池が研究されている。しかし、その多くで課題となっているのが Li 金属負極の利用である。すなわち、放充電時の Li 溶解析出反応を繰り返すことで Li が樹枝状に析出 (Li デンドライト) による短絡やこれによる発火が危惧される。代替負極としてシリコン (Si) が期待されているが、Si は Li を含有せず予め簡便かつ高深度に Li 合金化しておく必要がある。また、Li-Si 合金負極の表面では電解液が一部還元分解したり、表面の酸化シリコンの還元由来する初回充電時における不可逆反応が比較的大きいことから、これらを相殺するためにも Li プレドープ法の開発は極めて重要な技術と言える (図 1)。

本研究では、将来の次世代電池用 Li-Si 合金負極を簡便かつ効率よく作製し得る溶液法による Li 合金化技術を開発することを目的とする。具体的には、これまで当研究室で研究を進めてきた Li-ナフタレニド (NTL) 溶液による Li プレドープ法を更に進化させる。すなわち、これまでは本溶液の溶媒を種々替えることで、溶媒和構造が変化し、Li 合金化が進みやすい溶液組成ではナフタレンの -1 価よりも -2 価の陰イオンの生成量が増え、Li 合金化力の指標となる還元力も増大することを見出

してきた (図 2)。そこで、今回はナフタレンの分子構造に着目し、類似する他の芳香環化合物を種々検討することで、更に安定に -2 価の陰イオンを生成し、還元力もより強く短時間で効率的に Li 合金化を進行する Li プレドープ溶液を探索する。また、高容量であるが同様の課題を抱え、今まで LIB に採用できなかった Si 以外の負極にも応用し、その有用性を検証する。

昨今、世界的にカーボンニュートラルの概念が浸透し、電池についても如何に CO<sub>2</sub> を排出せずに作製するかが重要になってきている。例えば、本技術は電極材料を熱や電気を使わずに合成する新しい手法としても利用でき魅力的である。我が国をはじめアジア太平洋圏活性化のため、次世代電池の観点から新しいモノづくりの概念を発信していきたい。

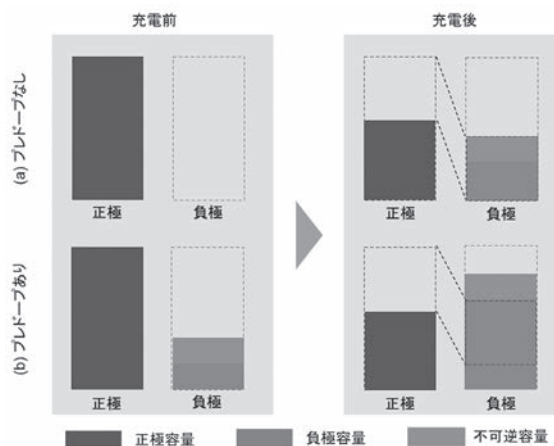


図 1 Li プレドープによる不可逆容量の低減

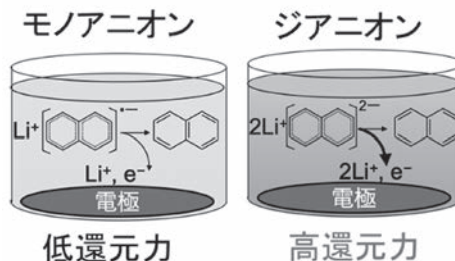


図 2 Li-NTL 溶液による Li プレドープ

## 招聘外国人研究員との交流報告

### Understanding Gen Z Market in the Post COVID-19 Era of Tourism: Destination Attributes from a Case Study of Japan

Oratai Krutwaysho

Rajamangala University of Technology Lanna Chiang Mai, Thailand

The Center for Asian and Pacific Studies (CAPS) at Seikei University gave me a wonderful chance to explore a research issue on Generation Z with the 2023 Visiting Research Fellowship program. My gratitude is extended to CAPS and Seikei University for the fellowship. My special thanks also go to the CAPS team, for their kind help and various support during my three-month fellowship at Seikei University. I am also grateful and thankful to Professor Reiko Fujita as my host and co-researcher. Collecting data with questionnaire surveys has never been easy in Japan. Not only does it require time and good connections, but also in-depth understanding of distinctive cultural aspects on how to approach people to participate in the survey in Japan. Professor Reiko has given me all the support I needed. I am also indebted to Professor Yasuo Ohe at Tokyo University of Agriculture and other Japanese professors at various universities and institutions for their kind help in data collection as well as giving me opportunities to meet up and to teach the students both online and on site which allowed me to have a greater perspective of the Japanese Gen Z and observe them more closely as the research subject under investigation. I could say that my work would have never been completed without them.

My three-month fellowship here at CAPS has given me more insights about Japanese cultural aspects. Although my current research focus is on Generation Z as a prospect market of the tourism industry, I have come across various cultural features here and there in Japan that can also be exploited as tourism marketing tools and strategies. Japan is a country of great integration between authenticity and modernity. While seeing robotics, automation and modern technology revolving around my daily life in Japan, in the blink of an eye, come the longstanding and localized traditions and

cultures. During my fellowship, as a tourist and a tourism researcher in Japan, I usually traveled around over the weekends to learn and experience different aspects of culture traditionally practiced by Japanese societies. It is interesting that no matter which generation people are, they mostly fit into a mixture of the beauty and charms of cultural diversity in positive and healthy ways. I can see that people of different ages are able to enjoy different common grounds regardless of their age differences.



Two main streams that I encountered are folk and pop cultures. It is extremely delightful to witness young and old generations embracing folk cultures and new pop customs into their lives quite smoothly in Japan. Witnessing Gen Z students practicing different Japanese traditional sports namely Kendo, Aikido and Judo in early morning and after daily classes every evening is so experiential and meaningful. Likewise, observing older generations connecting with globalized pop culture such as convenient SNS, digital technology and anime characters is convincing and compromising. These co-exists and blended society in Japan are so fascinating and they highlight the distinctive and harmonized identity of the nation, though they are being threatened by globalization and glocalization forces. This is why Japan is a fascinating country to explore and to study. There is so much to learn about its rich history, unique old and new customs and diverse traditions. I truly cherish this

chance to conduct a research project and learn about Japan this year with the support from CAPS, Seikei University. This fellowship is a significant gateway for promotion of international understanding, cultural awareness advancement and also academic development.

After my three-month fieldwork at Seikei University, the data from my questionnaire survey will be analyzed, discussed and concluded. This collaborative research will

unveil the needs and travel culture of the Japanese Gen Z as a future market for the tourism industry. It will propose strategic options for tourist destinations to attract the young generation in crisis as a way to restart post pandemic tourism. Lastly, I would like to thank Ms. Teranishi at CAPS for all kinds of assistance both before and during my fellowship, and again CAPS, Seikei University for this great fellowship. Let's hope that our paths will cross again.

## 拡大研究会 「タイにおけるグローバルツーリズム」報告

経営学部 3年 田戸岡 快聖

2023年5月24日に、藤田玲子ゼミにてタイ人でラジャマンガラ工科大学チェンマイ校に勤務されているオラタイ先生の特別講義が開催された。本講義のテーマとして、タイにおけるグローバルツーリズムが取り上げられた。タイの経済を大きく支える観光業を経済、歴史そして文化など多角の視点から解説をしていただいた。

まず、タイの基本的な情報を説明された。特に印象に残ったのが政府の歴史的変遷である。タイという国家は長年にわたって軍隊下の政治が行われている。政府のリーダーが軍隊である時とそうでない時で、著しい社会変化が現れていたことがとても興味深かった。また、さまざまな観点で日本と類似している点がある事に気がついた。例えば、宗教の面では9割以上が仏教であったり、民族割合ではその多くをタイ族が占めている。それに付随して、国家語であるタイ語以外の英語などの外国語の普及が広がらない。日本も厳密には仏教の中にさまざまな宗派があったり、単一民族国家ではないものの、一つの文化に国民が深く浸かっているという点で共通点を感じた。両国において、歴史ある洗練された一つの文化が根底にあるからこそ、観光業で大きな成功を収めているのではないかと感じた。

次に、タイの経済が取り上げられた。コロナ禍の2020年から2021年にかけては大きな衰退が見られるものの、2022年からは劇的な回復が見られている。オラタイ先生の話によると、これはタイの大きな産業である観光に大きく起因するものだという。実は、タイのGDPの約70%は観光業である。未だ、完全な回復はしていないものの、昨今の観光地ランキングなどを考慮すると、コロナ禍以前よりも大きな経済効果が見込まれるという

話であった。国の経済を観光業が大きく支えているケースを初めて知り、観光の大きな可能性を実感した。

そして講義は、よりタイの文化に焦点を当てられた。はじめに、タイ人の国民性が取り上げられた。私はここでも日本人と類似して

いる点が多くあると感じた。1つ目に、タイの人々は社会的ヒエラルキーを重んじる。それは、近隣の人々や初対面の人に対してであれば年齢、会社やある組織の中であれば相手の立場である。加えて、タイではその人の経済的裕福度さえも敬う対象になるという。2つ目に、タイの人々は感情を表立って表現することがないという。それは前述のように、タイ人の多くが信仰する仏教の教えに影響されるもので、感情をコントロールして他者と関わるのが大事とされているという。最後に、私がかつとも驚いたものとして、*indebtedness* (恩義、負債) の感覚が日本人と同様に強いという。私はこれまで、恩を返すという意味でお土産やお返しという文化があるほどであるから、ここまで恩義の感情を慈しむ国民性は日本特有のものだと認識していた。しかしそうではなく、タイでも何か恩恵を受けたのであれば感謝の言葉に加えて何らかの形でお返しをすることが大切にされている。このような国民性が、インバウンドの観光客からは高いクオリティーのホスピタリティとして認識されるのではないかと考えた。

最後に、タイの観光についてより深い話が展





開された。タイでは1960年から1979年にかけて観光当局やタイ航空の設立をきっかけに成長が始まった。翌10年の間ではインバウンド向けの観光キャンペーンが発足した。それを機に、さまざまな改革やサービス、観光地整備などを通して、今ではインバウンドにおける観光客ランキングでは世界10位になっている。一方で、観光競争力では42位となっているため、現在ではインフラストラクチャー整備や環境の改善に力を入れて取り組んでいるという。これまでの文化や経済などさまざまな観点から踏襲してこの結果を見てみると、タイの観光は独自の洗練された文化と国民性からなるホスピタリティがここまでの経済効果を生んだ

のだと思った。

以上のように、今回の講義を通じてたくさんの新たな知見と観点を得ることができた。タイの観光を多角的に分析したことで、観光業とはサービスやホスピタリティだけでない多くの要素が影響することがわかった。これらの知見を生かして、今後のゼミ活動では既存の考えにとらわれない多角的な視点で観光を分析し、ゼミ全体で自分たちができることを模索していきたい。



## シリーズ 本を読む

### 『自動運転レベル4 どうしたら社会に受け入れられるか』

(樋笠堯士著、学芸出版社、2023年)

理工学部 准教授 竹本 雅憲

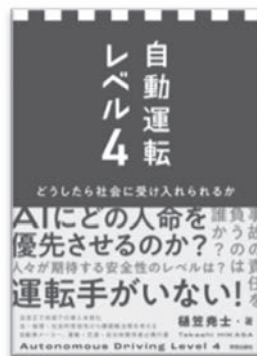
本書は、多摩大学経営情報学部専任講師で、自動運転倫理ガイドライン研究会で代表を務める樋笠堯士氏の著書である。「自動運転」に対して抱くイメージは多岐に渡るだろう。「スイッチを入れたら安全に目的地まで運んでくれる」、「自動走行中に暴走したらどうするのか」などの利点から欠点まで、それらはすべて現状の自動運転の技術開発や法整備で扱われ、議論されている。本書は、自動運転の開発・準備状況に始まり(1章)、人命が関わる事故の倫理問題(2章)、事故責任の所在に関する法の問題(3章)、そして、社会的受容性のための要件(4章)を論じている。

はじめに、「自動運転レベル」を簡単に説明する。多くの車両に搭載された運転支援機能はレベル1、2で、例えば、高速道路で先行車に自動追従してペダル操作しなくてよいACC(アダプティブ・クルーズ・コントロール)が該当する。運転の主体となる運転手は緊急時に責任をもって事故回避する必要がある。一方で、レベル3以上が自動運転となり、運転の主体はシステムにある。レベル3では緊急時のみ運転手に主体が移るが、本書の中心となるレベル4では緊急時を含めてシステムが運転の主体となる。レベル3、4では、場所、速度、天候などに関して「特

定条件下」という制約がある。日本では、高速道路の渋滞の低速走行時や、コミュニティバスの限定区画内での自動運転が実現している。また、トラックの運転手不足の解消として、先頭車両のみ運転手がいて、後続の車両群は自動運転で隊列走行するなど、サービスカーの自動運転も社会実験の段階にある。

このような技術の進歩に対して問題となるのが、倫理、法、社会受容性である。倫理の問題のひとつにジレンマ状況がある。そのまま走行しても、回避しても、誰かを事故に巻き込む状況で、どちらを選択するかである。この倫理問題は、自動運転の設計に大きく関係するが、日本では抽象的かつ高い安全性を要求されるガイドラインだけがあり、ジレンマ状況には言及していない。設計者にとっては、安全基準だけでなく、倫理的かつ政策的な観点のガイドラインが必要だと著者は述べている。EUでは交通弱者(歩行者、特に高齢者や子ども)に対して、通常より安全に走行し、通信デバイスを持たせて自動運転車に配慮させることも検討されている。道路が狭く、歩行者や自転車が混在する道路環境の日本では、この点も重要視すべきだろう。

法の問題となるのは、事故時の責任の所在であ



る。レベル2以下では、運転手に安全運転の義務があり、事故を予見できたか、事故を回避できたかが過失運転致死傷罪の論点となる。レベル3では、運転手に対応可能な運転交代の設計か、運転手が人間に期待できる役割を果たしたかが論点となる。私自身は、これらが特に運転手に関わる問題だと捉え、事故の予見や回避を助ける運転支援や、運転手が安全に運転交代できる運転支援のシステム設計に関わる研究を進めている。一方で、システムが運転の主体となるレベル4では、緊急時の対応体制や責任の所在、事故分析のための運転データの記録が必要となり、バスなどのサービスカーを想定した法整備が進む。我々が運転するオーナーカーに関しては、サービスカーの技術進展と法整備の社会的な確立の動向を踏まえて整備されていくだろう。

本書では、最後に社会的受容性も議論している。自動運転にどこまで要求するか。ある調査では、専門家は人間と同程度の安全を求めるのに対して、一般市民は人間以上の安全を求めていた。このギャップからも、自動運転車の利用者は、システムの機能の限界を知り、人間側の役割を正しく理解しなくてはいけない。また、ときには、システムの機能限界を考えて、周囲の人たちが配慮する状況も考えられ、社会的な広い理解も必要となるだろう。あおり運転などのニュースが多く取り沙汰されるが、自動運転の導入を機に、我々の生活が便利で豊かになるだけでなく、周囲を思いやる風潮が強くなることを期待したい。そのためにも、自動車運転の研究者として、一般の方々が安心して利用できる運転支援および自動運転のシステムの実現に貢献していきたいと、あらためて感じた。

## CAPS 活動報告 (2023.6.16 ~ 2023.9.15)

### 1. 公開講演会、研究会等

～ CAPS 主催講演会 「アジア史探訪——史料の杜(もり)をゆく」～

|      |  |
|------|--|
| 開催日  | 2023年7月29日(土)  |
| 参加者数 | 240名   |
| 出演者  | 樋口 真魚 (文学部准教授)、久保 茉莉子 (埼玉大学大学院人文社会科学研究科准教授)、小松 久男 (東京大学名誉教授)、佐々木 紳 (文学部教授) |
| 司会者  | 中野 由美子 (文学部教授)   |

### 2. 研究出張

～海外出張～

|         |                       |
|---------|-----------------------|
| 期間      | 9月8日(金)～9月12日(火)      |
| プロジェクト名 | 中国古文字の文字論的研究：楚系文字を中心に |
| 出張者     | 宮島 和也 (法学部准教授)        |
| 行先      | 中華人民共和国               |
| 目的      | 研究発表                  |

～国内出張～

|         |                                       |
|---------|---------------------------------------|
| 期間      | 6月28日(水)                              |
| プロジェクト名 | アジア太平洋圏活性化のための次世代電池材料開発へ向けたLi合金化技術の開発 |
| 出張者     | 齋藤 守弘 (理工学部教授)                        |
| 行先      | 東京理科大学                                |
| 目的      | 研究発表                                  |

|         |                       |
|---------|-----------------------|
| 期間      | 8月12日(土)～8月13日(日)     |
| プロジェクト名 | 中国古文字の文字論的研究：楚系文字を中心に |
| 出張者     | 宮島 和也 (法学部准教授)        |
| 行先      | 京都大学                  |
| 目的      | 研究会参加                 |

### 3. 会議の記録

|     |               |
|-----|---------------|
| 開催日 | 2023年7月18日(火) |
| 会議名 | 第3回企画執行委員会    |

|     |                       |
|-----|-----------------------|
| 開催日 | 2023年8月2日(水)～8月16日(水) |
| 会議名 | 臨時企画執行委員会(メール会議)      |

### CAPS Newsletter No.160

2023年10月15日発行

編集発行：成蹊大学アジア太平洋研究センター  
〒180-8633 東京都武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <https://www.seikei.ac.jp/university/caps/>

CAPS の公式ウェブサイトは  
コチラ→

